



加藤喜志子さん(川添)

取材者：(特活) くびき野NPOサポートセンター 新保
取材日：5月15日

浪江の皆さんに会いたい

浪江町で美容師として働いていた加藤さん。
昨年9月から、近所に住んでいる娘さん夫婦と
一緒に新潟市北区で生活しています。



▲ふるさとの浪江をなつかしむ加藤さん

震災当日、美容室で仕事をしていたときに地震が発生しました。家族全員の無事を確認できましたが、あの当時は何がなんだかわからないまま、ただ避難することしかできなかったのを覚えています。当時、私たち夫婦は福島県内に残り、一緒に住んでいた娘夫婦は茨城県ひたちなか市へ避難したため、家族離れ離れになってしまいました。その後、娘夫婦とも合流し、昨年8月まで新潟県長岡市などで避難生活を送り、昨年9月から

新潟市北区のアパートに住んでいます。避難中は各地で多くの方々に助けられました。皆さんのあたたかい気持ちが本当にうれしかったです。現在、主人が仕事の関係で福島県二本松市の方に単身で住んでいるため別々の生活をおくっています。少し寂しいですが、すぐ近くに娘夫婦が住んでいるので安心です。孫たちの世話をしたり、一緒に遊んだりするのが毎日の日課になっています。今年の4月から孫たちが幼稚園に上がり、自分の時間が少し取れるようになったので何か新しいことを始めてみようと思っています。また美容師として復帰したいという気持ちもありますが、今までお客さんだった方たちも各地に避難されてしまい、店舗を構えたり設備をそろえたりすることを考えるとなかなか難しいのが現状です。現在は住むところも食べるものも十分であり、新潟市は生活するのに何の不自由もなくいいところです。しかし、気持ちが少し内向的になってしまふこと

も多く、浪江で大好きな美容師の仕事をしていたころの生活を思い出したり、浪江の皆さんと顔を合わせてたわいもないおしゃべりをしたいなど思ってしまうます。震災以前は、浪江の自宅の庭で土いじりやガーデニングをしたり、浪江の皆さんを外で見かけたりして元気そうだなとわかると、それだけで自分も元気になっていました。私は生まれも育ちも浪江町です。やっぱりふるさとっていいなと思います。浪江の人たちの笑顔、十日市、盆踊り、コスモスの花が咲く風景・・・いつかふるさと浪江に帰れる日が来ると願っています。

浪江のこころ通信

・第12号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこたわりを発信・共有しようとするものです。

※東北圏地域づくりコンソーシアム推進協議会は、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信」第12号への感想をお寄せください。

【連絡先】〒976-0904 福島県二本松市郭内一丁目196-1
男女共生センター内 浪江町役場二本松事務所
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243-22-4261





牛渡 愛香さん(幾世橋)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：5月9日

今を頑張りながら、楽しく過ごしたい

請戸にあった夫、三四郎さんの実家で地震と津波に遭い、ご家族と2人の子どもたちと避難した愛香さんは、昨年6月から現在の福島市の借上げ住宅で、震災後に出産した長女 望愛ちゃんと愛香さんのお母さん(洋美さん)、夫と長男の龍之介君、次男の虎之介君の6人で暮らしています。



▲左から、三四郎さん、虎之介くん、龍之介くん、愛香さん、望愛ちゃん

■愛香さん
震災発生時、夫は職場研修で福島市に滞在中でした。私は当時保育士をしており、仕事を終えて子どもたちを迎えに請戸に立ち寄っていました。高台に逃れて夫の両親も子どもたちも無事でしたが、実家は津波で無くなりました。原発事故が起きたその日は夫の義姉の家を頼りましたが、原発事故が起きたの

で、津島にある私の祖母の家に避難しました。その後、叔母がいる福島市や伊達市、今の家に程近いアパートなどに移り住みました。浪江の仮設住宅が笹谷あたりにできるという話を聞き、その近所にしよう、今の住まいを決めました。
学生時代の友人が数人、福島市に住んでおり、とても助けられています。震災当初、「ガソリンさえ手に入れば、いつでも手伝いに行くからね。」と言ってくれたことが忘れられません。私も夫も浪江生まれの浪江育ちで、福島市の夏の蒸し暑さと雪の多さには本当に戸惑いました。やはり、浪江に帰って親や子どもたちと暮らしたいとは思いますが、将来のことよりも、家族そろって暮らせる「今」を大事にしたい、楽しく過ごしたい、いつも思っています。

■三四郎さん

私は双葉地方の消防署(双葉地方広域市町村圏組合消防本部)に所属しており、現在は川内村にある出張所に勤務しています。休日前後は、福島市から約2時

間かけて職場に通っています。震災当時、福島市にある県消防学校で研修中でしたが、当日様子を見に帰れたので、家族とは義姉の家で会うことができました。帰町に関しては、国や町の方針に従おうと思っています。私たちはまだ若いですが、急いで判断をしなくてもいいと思っています。電気や水が止まったままでは幾世橋の家の修理はできませんが、状況がよくなれば、町に戻り、直して住もうと考えています。しかし、悶々と考えてもすぐに答えが出るわけではありません。それよりも、今、いかに楽しく過ごせるかを考えています。家族も応援しに来てくれましたが、昨年10月に行われた第5回福島市町村対抗軟式野球大会に出場しました。残念ながら福島市に1対2で敗れて準優勝に終わりましたが、離れ離れになっっている仲間たちと再会できたこと、津波で亡くなったメンバーを偲ぶことができたことに大きな意味がありました。来年は優勝を狙いますよ。

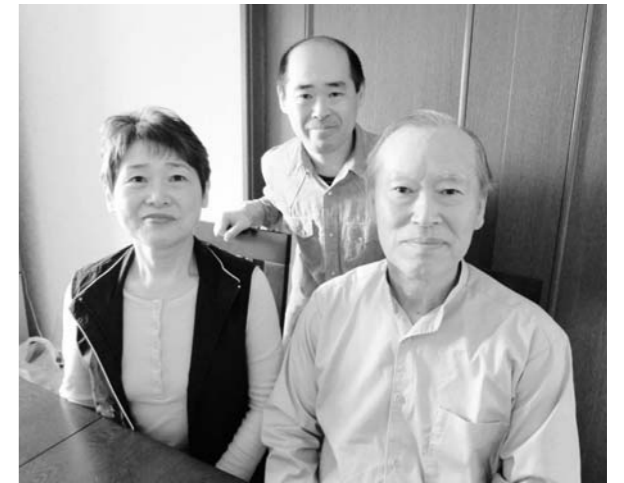


松本 幹夫さん(権現堂)

取材者：高崎経済大学櫻井研究室 櫻井
取材日：5月13日

生活再建を模索する日々

松本幹夫さんは、妻のミドリさん、そして息子の渉さんとともに埼玉県久喜市の借り上げアパートで生活しています。震災から1年数カ月間、国・県・町から示されるはずの今後の方針を待ち続けています。



▲左から、ミドリさん、渉さん、幹夫さん

私たちは震災後、川俣町の避難所からさいたまスーパーアリーナに双葉町民などと一緒に移り、昨年5月からは2次避難所となる埼玉県熊谷市のビジネスホテルで生活していました。暑い夏を挟み10月までホテルで過ごしましたが、長期にわたる狭いホテルの一室での生活は厳しいものでした。6カ所目の移動となる現在の久喜市に移ってからは、生活環境もだいぶ落ち着き、近くにある図書館や公園を利用したりするなど、のどかな環境の中で静かに暮らしています。

浪江町当時は、修行から戻った息子と一緒に権現堂で時計店を営み、地域の皆さまに支えられて生活していました。同じ仕事を今の場所ですることは難しいと考えています。地域の皆さんとの繋がりも希薄になってしまったため、先日も参加した「なみえのしゃべり場」のような浪江町民の交流の機会は本当にありがたいです。ただ、そうした交流会に集まる方が、私達も含めいつも同じような方々であることは少し気になります。

浪江は自然豊かな町でした。離れてみて分かることですが、山の幸や海産物が豊富に手に入り、この地域で楽しく暮らしていたように思います。商売をやっていた立場から見ても、浪江町は仙台圏でも福島圏でもいわき圏でもなく、経済が町の中で完結していた魅力的な町でした。そんな町に、地震と津波、そしてあのような原発事故が起こるなどはまったく思っていま

馴染みのお客さまに支えられてきたこれまでの生活を懐かしく思い出すと同時に、浪江町で以前のようにならぬように、浪江町のか不安でなりません。毎月の『浪江のこころ通信』では、各地で前向きに生活されている町民の皆さんの声を多く目にしますが、とてもそのような気持ちにはなれずにおります。町の復興ビジョンでは、各地にバラバラに暮らす町民を福島県内数カ所に集めた「町外コミュニティ」という案が出ているようですが、乗り越えるべき課題も多いように感じます。今後の町の方針がどのようなものか見極めたいです。

自分たちのような商工農漁業者が、一日でも早く自立した生活への一歩を踏み出せるように、そしてすべての避難生活を送っている人々がこれ以上不幸にならないようにするためにも、国には資産買上げ・完全賠償・除染の迅速化・原発に替わる新たな産業創出なども含め、浪江町に戻りたい人・新天地での生活を決断した人、それぞれの事情に見合った抜本的な支援策を早く示して欲しいと願うばかりです。



鈴木 宏孝さん・キミ子さん(権現堂)

取材者：へるめす編集工房（元気玉プロジェクト） 鈴木
取材日：5月14日

「会津地方なみえ会」発足で絆づくりを

町内で食堂を切り盛りし半世紀という鈴木さんご夫婦は、埼玉県に一時滞在後会津若松市へ。小さなお孫さん2人を連れての避難はミルク不足の問題に一番頭を痛めたそうです。

新町で店を開き50年になる「やよい食堂」の主人です。震災当日は昼の繁忙時間が過ぎ、一息ついたところで地震に遭いました。店そのものはどうにか無事でしたが、店内はラーメンスプの入った寸胴鍋がひっくり返り、食器もすべて落ちてしまいい大変なありさまでした。

12日朝に避難指示が出たので、1歳半と2歳10カ月の孫を連れ、息子の運転で津島の親戚を頼り3日間お世話になったあと、川俣町を経て埼玉県の長女宅にて20日間滞在し、3カ月を会津若松市東山温泉で大熊町の方と過ごしたのち、現在の借り上げ住宅に入る事ができました。

二次避難先のホテルでは夜、6カ月の孫がむずかり、妻は毎晩、背におぶったまま寝ていました。孫が大きくなったらこの話をしたいと思っていま

す。この1年にあつたことやこれから、孫子の代まで語り継いでいって欲しいというのが、私たちの願いです。

次女とは仕事の事情で1カ月間会うことができず、それ以外はずっと家族離れ

離れにはならず、別世帯ではあります。同じ借上げ住宅に住むことができたのは幸いです。

会津地方には現在1000人ほどの浪江町民が滞在していること、横のつながりを持たなくてはと、この4月19日に「会津地方なみえ会」を発足したばかりです。少しずつお声がけをしています。絆づくりに役立てていただければと考えています。

借り上げ住宅に入って間もなく1年。会津の雪深さには驚きましたが、それだけに春の訪れはうれしかったです。昨年とは花見どころではありませんでしたが、今年はさつそく「会津地方なみえ会」メンバーとともに鶴ヶ城公園にブルーシートを広げて料理を持ち寄り、花見をしました。請戸川リバーラインでのにぎやかな花見イベントと重なり、まぶたに懐かしく思い出されます。

二本松で行われる町のイベントにも、バスをチャーターしてみんなで行ければいいね、とかさまざまなアイデアを出し合っています。会津地方にお住まいの方は、どうぞご参加ください。



▲宏孝さん(左)とキミ子さん(右)



▲かわいいお孫さんたち



佐藤 弘子さん(権現堂)

取材者：へるめす編集工房（元気玉プロジェクト） 棚木
取材日：5月14日

楽しく遊ぶ子供たちの姿が、前向きな気持ちの応援に

震災後にご主人の実家から浪江町津島地区のつしま活性化センター、いわき市、塙町へと移動しながら避難。現在は会津若松市北滝沢のアパートで、お子さんたちの笑顔に励まされながら、ご家族で暮らしていらっやいます。



▲お子さんたちと一緒に。

震災当日は、上ノ原地区にある夫の実家に家族5人で避難、待機しました。原発事故があり翌日避難命令が出たので津島地区へ移動し、避難所になっていたつしま活性化センターへ身を寄せました。しかし、原発事故の不安があり、同じく避難していた夫の両親と私たち家族、近所の方たちと20名近くで車数台に分乗して、いわき市の知人を頼って移動し、そこで3日間ほ

どお世話になりました。その後、向かった塙町の公民館で、私の両親とも再会し合流することができました。これからのことを思うと不安でいっぱいでしたが、このころはまだ、1週間ほどたてば浪江の家に帰れるだろうと軽く考えていたのです。ですが、兄が仕事でお世話になっていただいた方がアパートを用意してください、3月19日から会津若松市で生活することになったときには、「もしかしら、すぐには帰れないかも」という気持ちで心をよぎっていました。子どもたちに、学校が変わることや、帰れないことをどう説得すればよいか夫と悩みました。皆それぞれに避難しましたので、友人とも気軽に会うことが難しくなりましたが、近所の方々から親切にしてください、落ち込んだり、不自由さを感じたりすることもなく過ごせることを、とてもありがたく思っています。避難の際にも多くの方にお世話になり、今も感謝の気持ちでいっぱいです。

会津若松市にもいろいろなお祭りがありますが、やはり浪江

の十日市のにぎわいが思い出されます。露店の列が遠くまで並んで、毎年家族みんなの楽しみでした。小さな町でしたが、気候も温暖で、海も山も近く自然豊かな暮らしやすい町だったことを思うと残念でなりません。こうして離れてみると、楽しいこと、すてきなところがいっぱいあつたことを改めて思います。

あれから1年が過ぎ、子どもたちも新しくできたお友だちと楽しく遊ばまわっています。震災に遭い、避難生活を体験したことで子ども心にいろんなことを考え、負担もあつただろうと思いますが、気持ちを切り替えて前向きに楽しく毎日を過ごしている姿に、私も夫も励まされています。

野球好きな長男は、浪江でも少年野球チームで頑張っていました。今回、会津若松の少年野球チームに入団しました。これからの季節は、たくさん試合も行われるので、家族で応援に行くのを楽しみにしています。



安倍 由恵さん(請戸)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 遠藤
取材日：5月19日

娘が請戸の田植え踊りを練習中。 7月のお披露目が楽しみ！

震災後は、猪苗代や埼玉など何度も引っ越しを重ね、昨年7月から仙台市泉区のマンションに家族4人（夫、娘2人）で住んでいます。震災1カ月後に生まれた娘さんもすくすくと育ち1歳に。

■浪江町請戸を伝えていきたい
長女は「請戸の安波祭の田植え踊り」の練習の真っ最中。7月に東京の明治神宮で披露する機会があるので、それに向けて毎日練習しています。これも、踊りを覚えるためのDVD制作や配布、発表会の段取りなど、佐々木繁子さんや渡部忍さんらがご尽力してくださるからと感謝しています。今は離れてしまったものの、こうやってお世話になっていると、以前住んでいた請戸では、近所の方々がみんな父母・祖父祖母のように娘を育ててくれたことを思い出します。

■浪江高校ソフト部で集まりました！
避難してからは友人やお世話になった方となかなか会うことできませんでした。浪江高校ソフト部時代の友人や監督と連絡を取り合ったりしています。全国大会に出場したときのことや遠征に行っていた思い出を語り合ったり、友だちはどこにいてどんな暮らしをしているのか教えあったり…。「今年の秋ごろにはみんなが集まりたいね。」と実現を夢見ているところです。



▲娘さんの成長が日々の楽しみ。左から、陽菜ちゃん、由恵さん、歩花ちゃん。友人や親族から届く差し入れやプレゼントを抱えながらパチリ！



吉田 絵美さん(酒田)

取材者：(特活) 山形の公益活動を応援する会・アミル 寺澤、柴田
取材日：5月12日

大切な家族と一緒に



▲家族そろって。
左から、お母さんの三重子さん、絵美さん、理人くん(9カ月)、夫の大祐さん、るなちゃん(小2)。「皆さん、山形県赤湯市に来たときはお店に遊びにきてください。」

吉田さんご家族は、現在山形県南陽市に家族5人で暮らしています。夫の大祐さんは勤務地である新潟県から週末に帰ります。

震災時、妊娠中だった絵美さんは昨年8月に理人くんを無事出産。新たな家族が増えました。

母の三重子さんは7月に、山形県赤湯市内に山形に嫁いだ娘さんと一緒にスナック「エルベ」をオープンする予定。

避難している福島の人たちが交流し、励みにできる場所を作ったり、福島や浪江の名産品などをPRしたりと、浪江町復興のため少しでも役に立てればとお話していました。

今なら冷静に考えられるのですが、震災時は妊婦だったので、「ここにいたら危ない、まずお腹にいる子どもと自分の子どもと逃げなきゃ。」ともうパニックになっていました。ですが、12日朝の避難指示の後、姉の嫁ぎ先のお姑さんたちから「すぐ山形に来なさい。」と言ってもらい、その日に南陽市に避難し、その後1カ月半お世話になりとても感謝しています。南陽市役所で避難場所の相談にのっていただき、地区の方もいい人ばかりで落ち着いて暮らしています。娘のるなは、南陽市の小学校に入学し2年生になり、友だちもたくさんできました。先生も良い方で安心して通っています。浪江にいたときの友だちは、それぞれ避難先も遠くなかなか会えず寂しいですが、頻りに連絡を取っているので避難先で頑張っている状況などを教えてもらっています。みんな頑張っているから自分も頑張ることができます。浪江町役場から子どものための情報ももらえるとありがたいです。

昨年、一時帰宅してきましたが、変わってしまった自分の家や町の姿を泣きながら見ました。町に戻れないことは感じていますが今後自分たちはどうしていけばよいか、町の除染や復興のことなど、たくさんのことを考え不安もあります。山形も住みやすい所ですが、やはり地元は良かったです。日に日に強く思います。浪江は、海も山も近くて住みやすく、30年間暮らしたたくさんの思い出があります。今は姉の近くに来たということもうれしく親も一緒なので、自分たちの大切な家族がそばにいる南陽市にいるつもりです。子どもたちが大きくなったらいつか浪江町に連れていきたいと思っています。

は友人らと郡山市のカルチャーパークのイベントに、趣味である雑貨づくりで製作したものを持参し出店しました。わいわい楽しく友人らと過ごせました。東京や福島、会津などばらばらになつたしまった友人とも今後会う機会を作っていきたいです。今後は、しばらくは仙台住まいかなと思っています。これ以上暮らしが悪くならないで、子どもにも不自由なく元気に過ごせる環境で育ててあげたいですね。今一番大事にしていることがあります。



きよはし薬局駅前店 佐藤 伸哉さん(権現堂)

取材者：浪江町役場 長沼・鳴原
取材日：5月21日

三春から“きよはし”の名前に思いを込めて

浪江町に「きよはし調剤薬局」をオープンしてから5年半。地域の方々とのつながりができてきた矢先の震災で、スタッフも患者さんもばらばらになりましたが、3月5日に三春町で薬局を再開。「浪江町を感じられ、気軽に来てもらえれば。」と薬局の名前を「きよはし薬局駅前店」とし、三春町から「なみえ」を発信しています。

震災時は、きよはし調剤薬局で仕事をしていたのですが、翌日から西病院に病院のスタッフと一緒に残って、入院患者さんのために薬を作り、手伝いをしていました。3月14日に自衛隊のヘリコプターが来て、夜中まで患者さんを搬送し、15日に明るくなつてから三春町に避難しました。三春町に来てからは、さくら調剤薬局とみはる調剤薬局で仕事を手伝えました。三春町にも多くの避難者がいて、4月、5月は朝から夜中までフル回転の日々でした。津島診療所や岳温泉、仮設住宅にもお薬を届けました。

その後、縁あって「薬局を新しく作ろう。」というお話をいただき、三春町で薬局を再開することにになりました。名前を決めるときに社長が「きよはし」の名前を残しましょう。」と言って、名前を「きよはし薬局駅前店」に決め、3月5日にオープン。オープン前には、「ここでやっても浪江とは違うし、これでいいのよ。」という気持ちになったこともありましたが、事業を再開した方に多かれ少なかれある気持ちだと思いますが、「みんな



▲スタッフの皆さんと一緒に。真ん中が佐藤さん。社長の濱田博夫さん(左)は「三春町にも『なみえ』があるよ」と発信していきたい。」とお話ししてくださいました。



▲「きよはし調剤薬局」から持ち出した看板が掲げられています。

浪江町で生まれ育つた方々はもつと強い思いがあると思います。これからもここに「きよはし」があることを伝え続け、浪江町の方が立ち寄って、「懐かしいね」とお茶を飲んで集える場所になればいいと思っています。

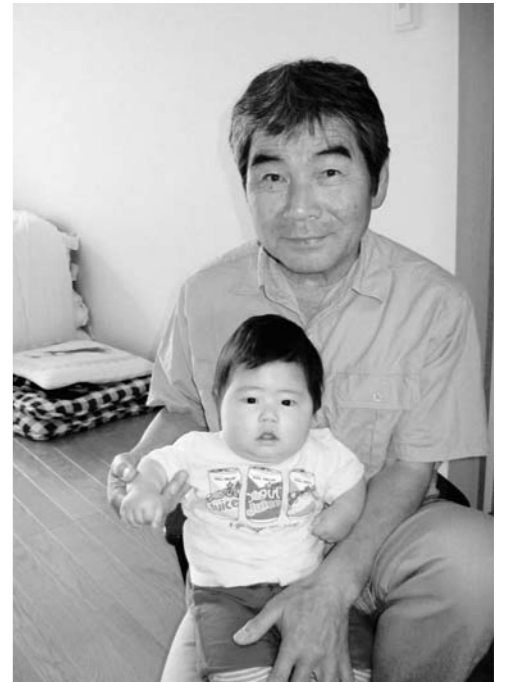


今野 友廣さん(津島)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋
取材日：5月17日

前向きに暮らすことを心がけています

避難先を何度か変え、昨年4月から、今の都営住宅に住んでいる今野友廣さん、あや子さんご夫婦。娘さんとお孫さんたちも同じ都営住宅に住んでいます。



▲昨年誕生したお孫さんと一緒に。

「津島にいたら、山菜摘みをしてたころだなあ。」と2人で話しています。津島は標高400メートルほどの山間にあり、酪農や農業を営んでいる人たちがほとんどでした。私は、兄たちと一緒に石材業を営んでいました。原発事故後、「浪江町の西側へ避難して。」という役場の指示で、大勢の人たちが津島に避難してきました。2日間ほど、避難してきた人たちに炊き出しをするなどしていました。津島が計画的避難区域に指定されるまでは、放射線量が高い状

態になつているとは誰も思いもせませんでした。もつと早くに正確な情報がもらえられたらと、今でも強く思います。郡山市に嫁いでいた娘の比呂美は、2人目の子どもを妊娠中でした。おなかの子と3歳になる上の子のことを考えると少しでも安全な場所に避難したいと、3月17日に娘たちと一緒に福島を出ました。数カ所の避難先を経て、4月1日に、現在住んでいる都営住宅に入居、昨年10月には、娘が無事に男の子を出産、ほつとしました。娘と2人の孫たちは同じ都営住宅の別棟に住んでいるので、孫たちの面倒を見ながら生活しています。

3棟ある都営住宅には、福島や宮城、岩手から118世帯の人たちが避難してきていて、避難者交流会がときどき開催されます。交流会や区役所主催のイベントなどには、できるだけ参加するようにしています。自転車や浅草や日本橋まで出かけたリ、ペランダに置いたプランターで、野菜を育てて楽しんでいますが、近くには商店街もあり便利ですが、工夫をしないと単調な

生活になつてしまっています。豊かな自然に囲まれた以前の暮らしとは比べようがありません。帰ることができるとは津島に帰りたい、ここでの暮らしは「仮の住まい」と感じています。今の楽しみの一つは、川俣町で毎年10月に開催される「コスキン音楽祭」に向けての演奏練習です。6年前にできたフォルクロレのサークルに夫婦そろって参加、演奏を楽しんできました。数カ月に一度開催される練習には、福島県内外に避難している10数名のメンバーが集まります。車で片道4時間ほどかかり大変ですが、欠かさず参加しています。

福島を遠く離れての生活ですが、夫婦2人、元気に暮らしていければと思っています。